

#### ●One Sky One World

(<http://www.earthnet.net/jpa/osow/>)

「One Sky One World」は、世界平和と環境保護を目的に設立されたNPO組織であり、1985年より毎年10月第2日曜日に開催される、組織名を冠した世界凧揚げ祭の名称でもある。欧米でもアジアでも、人々にとり凧は平和の象徴だが、日本ではそうした観念から、わずかだが距離があるように思える。‘高く揚げる’ことを目的として、科学とともに進化した欧米のカイトと、‘上手く揚げる’ことにこだわり、大衆文化の中で育った日本の凧との根本的な違いなのだろうか。さてイカ、タコに続く第三の凧の正体である。

#### ●南インドの空から・・・

関西のイカ、関東のタコ、九州長崎の第三の凧と役者が揃った。江戸享保年間(1716～1735)、関西のイカは、形の自由な遊びに熱狂する町民文化の中で「奴凧」を生んだ。関東のタコは、浮世絵等の大衆文化の影響を受けつつ日本

独自の「角凧」へと発展した。一方、九州長崎では、江戸の鎖国政策の影響下、「第三の凧」が長崎の出島に上陸した。この凧は、長崎地方では‘ハタ’と呼ばれる。長年、私は‘ハタ’はポルトガルやオランダ船の‘旗’に由来すると考えていた。だが数年前、『新版日本語の起源』で、南インドのタミル人が話すタミル語で布、旗、凧を‘pat-am’と呼ぶこと、古代日本のp音が中世のf音から現代のh音へ変化したことを知り考えを変えた。タミルでは凧を‘パタン’と呼ぶ。その‘パタン’を、インドやインドネシア経由で長崎に持ち込んだのは、1641年以降、長崎の貿易を実質支配したオランダ東インド会社だった。当時の長崎の住民は‘パ(p)タン’を‘ハ(h)タ’と聞いたのだろう。長崎上陸が平安時代だったならば、‘フ(f)アタ’と聞いたはずである。‘ハタ’を揚げたのは、オランダ人ではなく、彼等の使用人として同伴したインド、タイ、マレーシア、あるいはインドネシアの人々だった。

当時のヨーロッパでは、凧揚げはまだポピュラーではなかった。

#### ●長崎の空へ・・・

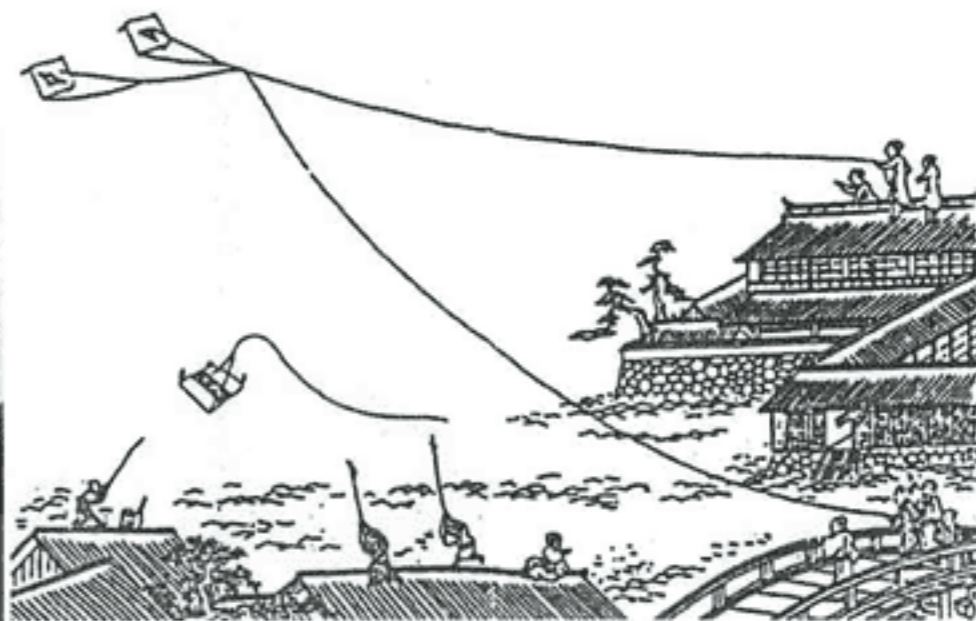
ところで、長崎の空をハタが舞った事実は少なくとも文献上は「方言でハタと言う」の記述がある、『長崎歳時記』の寛政元(1789)年より遡ることはできない。しかし、オランダ人が出島に登場して20年後の寛文元(1661)年、丁度、江戸でタコが誕生した頃、長崎の文人西山宗因は自らの詩に「長崎のぼり」と詠った。その後享保2(1716)年、同じ長崎の文人西山如見は「イカノボリ」と詠った。ここでは詳しく語れないが、この二つの詩の凧はハタではない。しかし、イカでもタコでもない。実は、長崎開港(1572年)からハタが普及する18世紀半ばまでの約200年の間、長崎人の心をとりにした不思議な凧がある。今回は、ある奇跡にまつわる凧の物語である。

#### 【参考引用文献】

- 1.『新版日本語の起源』(大野晋著、岩波新書)
- 2.『長崎 歴史の旅』(外山幹夫著、朝日新聞社)
- 3.『凧大百科～日本の凧、世界の凧～』(比毛一朗著、美術出版社、1997)



2005年10月9日、タイにて開催の「世界凧揚げ祭」で揚げられたレターカイト。



(図) 右上方、出島の建物の屋根に上り、ハタを揚げているのはオランダ東インド会社のオランダ人ではなく、インドからインドネシアに至る南島の人々である。手前の屋根の上が長崎市民。カイトランナー(やだもん)の姿もみえる。

#### ●編集後記

打て、打て、シュート!ゴ〜〜〜!打ち放たれたボールがゴールネットを揺らす。四年に一度のお祭り、サッカーワールドカップ開催イヤーである。狙い済まして打つシュートさえ、あのゴールマウスを外して何度悔しい思いをしたことか。アレルギーをつめたリボソムの弾丸が体内に打たれ、アレルギーを攻略すべくゴール目差して駆け巡る。私達は大きいなるサポーターとなり、その研究の成果に拍手を惜しまないことだろう。自称アレルギーのデパートである私もその中の一人。石井先生ゴールマウスを揺らすシュート、宜しくお願いします。(あしだ)

#### ●編集部からのお願い

NTSニュースでは読者の皆様からの便りや投稿をお待ちしております。また、開催予定の勉強会・イベント等、掲載をご希望される方は下記宛までご連絡ください。

〒113-8755 東京都文京区湯島2-16-16 (株)エヌ・ディー・エス「NTSニュース」係  
FAX: 03-3814-9152 E-mail: k-kunimoto@nts-book.co.jp

#### NTSニュース

2006年6月号(通巻88号)  
2006年6月7日発行